

日本人と共犯化の政治

——「沖縄人も加害者だ」という言明をめぐって——

野 村 浩 也

(受付 2001 年 5 月 10 日)

1 は じ め に

2000年沖縄サミットを記念して、日本政府は、二千円札を発行し、その図柄に沖縄の象徴として守礼門を採用した。二千円札はあまり流通してないようだが、その一方で、沖縄サミットによってひろく流通するようになったものがある。「沖縄はアジアへの架け橋」、ということばがそれである。そして、ことばそのものの流通とは裏腹に、二千円札と同じくほとんど流通してないのが、このことばの有する問題性・政治性についての言説である。沖縄人小説家目取真俊は以下のように述べている。

二千円札には、まずサミットとあわせて、基地問題から県民の関心をそらしていくという狙いがあった。(略) 守礼門は本来、中国から来た使者を迎えるための扁額からきた名称だといいます。中国と沖縄の間には歴史的に長い付き合いがあり、サミット会場になる万国津梁館に示されるように、かつて沖縄は東アジアを舞台にして大きく活躍した。こうしたイメージが、いまかなり流通している。これは、政治に携わる者にはかなり都合がいい。沖縄が将来アジアのなかで活躍していくイメージと重ね合わせやすいですから。その延長で、沖縄でサミットをやるから中国を招聘しようという発想が生まれ、しかし断られた。／そのときに、明治以降の日本帝国主義が中国に何をしたのか、その一翼を担って沖縄の人は中国に何をしたのか、その反省はすっぱり抜け落ちていた。過去の歴史だけではなく、現在、沖縄には巨大な米軍基地がある。それは、中国にとって大きな脅威です。そういったことを問わずに中国にアプローチするような感性、反省意識のなさ是一体

何だろうと思うんですね。

[大江・目取真 2000: 181-182]

「沖縄はアジアへの架け橋」ということばが日本国において流通するなかで、沖縄には在日米軍基地の75%が集中させられている。そしてそれは、沖縄人が望んだものではない。いうまでもなく、それは、日本人が民主主義をとおして決定したことであり、沖縄に基地を押しつけている当事者こそ日本人マジョリティにはほかならない。「悪法も法なり」という古いことばがあるが、そもそも民主主義もまた差別を正当化し合法化する手段に堕する危険性をはらんだものなのだ [加藤 1999: 71-74]。この点において、日本人マジョリティの沖縄人に対する加害者性は否定しがたい。

また、基地が現在でも中国をはじめとするアジアにとっての脅威であること、さらにはベトナム戦争という大量殺戮を担ってきたことを想起するとき、沖縄に基地を押しつけている当事者すなわち日本人マジョリティのアジアに対する加害者性も否定しようがない。このような意味において、日本人マジョリティは二重に加害者性を有しているのだ。アジア、そして、沖縄に対して。したがって、「沖縄はアジアへの架け橋」ということばもどうしようもなくうさんくさいものであり、警戒すべきものといえよう。

米軍基地は沖縄人がみずから望んだものではない、といった。しかしながら、沖縄人のアジアへの加害者性も否定しようがない。なぜなら、いかに望んだものではないにせよ、基地の押しつけに抗しきれてないという現実によって、アジアに対する脅威、さらには、ベトナムでの大量殺戮の加担者にならざるをえなかったのだから [野村 1999]。そしてもちろん、目取真がいうように「日本帝国主義」の「一翼を担って沖縄の人は中国に何をしたのか」という現実を想起するならば、その加害者性を否定することも不可能である。「差別と戦争責任の問題」は、「絶対に心情倫理ではなく責任倫理で考えねばならないという問題」なのだから [馬場 1997: 53]。

ところで、念のために断っておくが、沖縄人に加害者性があるといって

も、日本人の加害者性が軽減されるわけでは断じてない。また、沖縄人がアジアのひとつとや同じ沖縄人に対する加害者性を認めたとしても、そのことによって日本人のアジアへの加害行為が免罪されるわけではけっしてないし、そもそも日本人を免罪するためにみずからの加害者性を認めるわけでもないはずだ。沖縄人がみずからの加害者性を認めようが認めまいが、それとはまったく関係なく、日本人の加害者性という現実は無動だにしない。さらに、琉球の武力による併合とその後の差別、沖縄戦と日本軍による沖縄人虐殺、沖縄を日本から分離し米軍統治下におくことを希望した「天皇メッセージ」¹⁾、75%もの在日米軍基地の押しつけ、などの日本人の加害者性が消えてなくなるわけでもない。

だがしかし、「沖縄人も加害者である」と言明することは危険な行為でもある。このことはつねに強調されなければなるまい。本稿は、この危険性についての分析である。実は、直前で念をおした内容も、まさしくこの危険性とおおいに関係している。たとえば、「ヨーロッパもアメリカも加害者なのだから日本人の加害者性ばかりを批判するのはおかしい」、というロジックが日本国ではまだまかりとおっている。ここには、ヨーロッパやアメリカの加害者性の助けをかりることによって日本人の加害者性を軽減しようとする戦略がある。では、この場合のヨーロッパやアメリカを沖縄(人)におきかえたらどうなるか。

そこでは、被害者を加害の共犯に仕立てるというあらたな暴力が発生してしまうのではなかろうか。「日本人も加害者だ、沖縄人も加害者だ、みんな加害者だ」、と。「みんな加害者なんだからここには被害者はいない、したがってだれも責任をとらなくてよい」、と。「沖縄人も加害者だ」という

1) 日本国敗戦後に昭和天皇の「希望」として宮内庁御用掛寺崎英成を通じてアメリカ国務省に伝達されたものであり、「天皇は、アメリカが沖縄を始め琉球の他の諸島を軍事占領し続けることを希望している。天皇の意見によると占領は、アメリカの利益になるし、日本を守ることにになる」といった内容のメッセージ〔進藤 1979a: 47〕。他に〔進藤 1979b〕を参照。

言明は、このような共犯化による被害者の消去というあらたな暴力を招きよせる危険性をはらんでいるといえよう。

2 共犯化のロジック

日本人の差別性や加害者性を指摘する場合、逆にこのように非難されることがしばしばある。「沖縄にも差別があるじゃないか。宮古・八重山を差別しているじゃないか」と。これに対して、「そのとおり」と即答する。すると、「だったら日本人を批判する資格なんかない!」とくる。この反応は、あきらかに批判ではなく非難であり、けっして反論にはなっていない。しかしながら、この日本人は完璧に反論したつもりになっている。では、いったい何に反論したつもりになっているのだろうか。

おそらくこれは、差別者が差別を正当化するロジックのひとつのバージョンであり、多くの被差別者に対して投げつけられている問題であろう。そして沖縄に関しては、池田緑も論じている。

この沖縄内部における多様な利害関係と権力・抑圧構造を強調することには非常に危険な落とし穴が潜んでいる。マジョリティによって、マイノリティ（沖縄）内部の多様性や権力・抑圧関係が強調されることは、現存するマジョリティとマイノリティの権力・抑圧関係を曖昧にし、忘却させることにつながる危険性がある。（中略）マジョリティにおいていかにその内部で多様な利害関係が存在しようとも、またマイノリティ内部において多様な利害関係／権力・抑圧関係が存在しようとも、それらに関係なくマジョリティによるマイノリティへの権力・抑圧関係は継続して存在するからである。たとえば、いかに沖縄内部において多様な利害関係が認識され、あるいは差別・抑圧関係があろうとも、その差別・抑圧しているウチナーンチュ（沖縄人）も被差別・被抑圧者であるウチナーンチュも、まったく区別なく同時にマジョリティ日本人から差別的構造に置かれているのである。それは、沖縄においてどのような多様性があろうとも、国土面積の0.6%の沖縄に在日米軍基地施設の75%が集中しており、沖縄人だれもが基地被害や基地の存在による経済発展の阻害を受けている点では同じであること

を想起すればよいだろう。／そのようなマジョリティとマイノリティの抑圧関係を見做して、例えばマイノリティにおける差別構造をもちだし、「差別する沖縄人」「差別される沖縄人」「差別する日本人」「差別される日本人」というようなカテゴリーによってマジョリティとマイノリティを同列に論じるなら、現存するマジョリティとマイノリティの差別・抑圧関係を曖昧にし、隠蔽し、さらには存続させるロジックを生み出すことにつながる。このことは、逆にマジョリティの側に自らのポジショナリティを曖昧にする効果をもたらしてしまう。

[池田 2001: 210]

日本人マジョリティは、宮古・八重山を含めた沖縄人全体に対する差別性を有している。沖縄内部の差別と日本人の沖縄人に対する差別性とは、けっして同列に論じうる問題ではない。両者はそもそも別の問題であって、いかに沖縄内部の差別を強調しようとも日本人の差別性を消し去ることはできない。また、いかに沖縄人が沖縄内部の差別を解決しえたところで、日本人による差別が解消するかどうかの問題とはさしあたりまったく関係がない。ところが、「沖縄にも差別があるじゃないか。宮古・八重山を差別しているじゃないか」というロジックは、両者を同列にし、日本人の差別性という固有の問題を沖縄人の差別性というまったく別の問題にすりかえるためにこそ用いられる。

池田は「現存するマジョリティとマイノリティの権力・抑圧関係を曖昧にし、忘却させることにつながる危険性」を指摘するが、わたしが問題化したいのは、その危険性とはいかなるものなのかということである。いいかえると、「現存するマジョリティとマイノリティの権力・抑圧関係を曖昧」にすることによってマジョリティの側が達成する政治的効果について考えたいのだ。

「沖縄にも差別があるじゃないか。宮古・八重山を差別しているじゃないか」という日本人の反応は、「そういうお前はどうかんだ！」と沖縄人を逆に問うている。ここで見落としてはならないのは、「お前はどうかんだ！」

と応酬すること自体、実はそのひとがすでに差別を認めているという意味を含んでいるということだ。そして、だからこそ、共犯つまり仲間を増やすことによる自身の差別性の軽減がはかられるのであろう。つまり、「沖縄人も日本人と同じ差別者なんだから、日本人のことをとやかく言えないでしょ」、だから「日本人を批判する資格なんかない!」、と。このようなロジックを、「共犯化による差別性の軽減」、と名づけよう。

また、「お前はどうかんだ」と応酬することは、逆に沖縄人を非難することであり、恫喝としても作用する。「沖縄人も日本人と同じ差別者だろ、自分のことは棚にあげてなんだ!」、あるいは「日本人のことをとやかく言ったら、困るのは自分自身だろ!」、と。こうすれば沖縄人側は何も言い返せなくなるであろうと想定しているのだ。何も言い返せなければ沖縄人も日本人と同罪であり、そのような共犯を仕立てることによって日本人は自己の差別性が軽減されたと感じ安心する。そして最終的に、「沖縄人に日本人を批判する資格なんかない!」などと捨て台詞でもはけば、この問題を終了させることができ、安心できる日常という思考停止に戻れるというのであろう。

以上、「お前はどうかんだ!」と応酬することによってマジョリティが達成する政治的効果について考えてみた。すなわちそれは、逆に沖縄人を問うことによって日本人自身の差別性を不問にする試みなのだ。いいかえれば、「日本人を問うな!」という方向へと論を導こうとすることであり、それこそ自分のことを棚にあげ安心するための論理展開である。このロジックを「共犯化による問いの封殺」と名づけよう。

そしてこれこそが差別をそのまま継続する方法である、ということにも注意しなければならない。なぜなら、差別とは差別者が存在してはじめて発生する現象であり、差別者自身が自己を問い変革することによってしか根本的には解決しないからだ。逆にいえば、被差別者は差別の原因にいっさい関与していないし、その意味で、差別を解決する責任がないどころかそもそも被差別者が差別を解決することなど不可能なのだ。差別の原因と

それを解決する責任は差別者に固有の問題であって、基本的に被差別者が関与しうる問題ではない。もしもその責任まで被差別者にもとめるならば、新たな差別以外のなにものでもない。このように、差別者自身が自己の差別性を問わないことは、差別を生成・維持する基本的な方法である。いいかえれば、差別者は自分を問わないことによって差別者たりえているのだ。

3 マジョリティは自分を問わない

ところで池田は、「マジョリティによって、マイノリティ（沖縄）内部の多様性や権力・抑圧関係が強調されることは、現存するマジョリティとマイノリティの権力・抑圧関係を曖昧にし、忘却させることにつながる危険性がある」と述べていた。だが、なぜその程度のことでマジョリティは「曖昧」にしたり「忘却」したりできるのか、というのがわたしがすぐさま疑問に思ったことである。

差別者は自分を問わない、と前節で述べた。しかしこれで終わりではない。差別者は自分を問わないためのロジックをすでに十分もっている、ということも前節で述べた。すなわち、「共犯化による差別性の軽減」と「共犯化による問いの封殺」である。おそらくこのようなロジックこそ、差別者あるいはマジョリティにとっての自明の前提であり、常識なのであろう。そして常識であればこそ、意識せずとも差別を生成・維持することが可能になるといえよう。この場合の常識とは、「共犯化によって差別を正当化する戦略」の別名ともいえるだろう。

また、常識であるならば、「沖縄人も加害者である」という言明の危険性もつねに前節で述べたような単純明快なかたちで存在するとはかぎらないのではないか。より複雑な、いいかえれば、巧妙なかたちでも存在しうるのでないか。すなわち、「現存するマジョリティとマイノリティの権力・抑圧関係を曖昧にし、忘却させる」ロジックは、まさに常識であるがゆえに、「良心的」にみえる論考にすら知らず知らずのうちに忍びこんでいるのかもしれない。逆にいえば、「良心的」な印象を与え、できるだけ複雑な印

象を与える論の展開が可能であれば、「沖縄人も加害者である」という言明を日本人を問わない方向へと巧妙に導くことができるのかもしれない。

この問題を考えるためにとりあげたいのは、社会学者大澤真幸のテキストである。沖縄人小説家目取真俊が語った「沖縄人も加害者である」という言明について、大澤はまず以下のように述べている。

今回の沖縄滞在の中で聞いたあらゆる言葉の中で、私にとって最も衝撃的な言葉は、このとき目取真の口から聞いた次のような論であった。沖縄と戦争との関係が議論されるとき、まったく不問に付されてきた盲点がある。沖縄の加害責任がいささかも主題化されてはこなかったのだ。沖縄は、常に犠牲者、受苦者としてのみ語られてきた。確かに、沖縄は犠牲者かもしれないが、同時に加害者でもあったはずだ。沖縄戦を戦った日本軍の中に沖縄人もいただろう。沖縄戦の中で、沖縄の軍人に殺されたり、他村の者に対して排他的な沖縄の村落共同体のいじめに苦しめられた沖縄人もいたに違いない。また、戦後も沖縄は基地をもってきたのだが、その基地から派遣された軍隊が、アジアの人々（たとえばベトナム人）を大量に殺害してきたのだとすれば、沖縄もまた、この殺戮に加担したことになるのではないか。沖縄の未来構想との関係で、しばしば「アジアとの連帯」が語られるが、沖縄が歴史的にアジアに対する加害者でもあったということの自覚なしに、そしてまたアジアへと向けられた軍隊を配備している以上、現在でもアジアにとっての脅威であるということの自覚なしに、アジアとの連帯は不可能ではないか。／目取真は、おおよそこのように語った。深く気高い言葉であったと思う。なぜ、この言葉が人の心を動かすのか？ この中に含まれている「真実」は何か？

[大澤 2000: 156]

「戦後も沖縄は基地をもってきたのだが」とは、目取真の話を聞いた大澤が文章化したものであるが、このように表現することによってうやむやにされるものがある。すでに述べたが、基地はけっして沖縄人が主体的に望んだものではない。また、あたかも自然現象のように沖縄にあるのでもない。よって沖縄人のポジションから表現するなら「基地を押しつけられて

きた」や「もたされてきた」の方が正確であろう。そして、「もってきた」では見えにくい、「押しつけられてきた」とすることによって見えやすくなるものがある。それは、「押しつけている主体はいったいだれなのか」ということである。もちろんそれは、大澤自身も含めた日本人マジョリティにほかならない。

このことを強調するのは、徹頭徹尾責任倫理で思考しているからこそ目取真は沖縄人の加害者性について語りえたのではないか、という理由からである²⁾。いいかえれば、戦争責任や差別の問題に関して、責任倫理で思考するということは、自己の加害者性を問わざるをえなくなるということでもあるのだ。ならば大澤も、基地に賛成か反対かの心情にかかわらず、まずは現在沖縄に基地をおいているという結果に対する自己の責任を問わなければアンフェアというものであろう。「沖縄は基地をもってきた」ではあまりに他人事のようにではないか。

もちろんこの表現については、「いやそれは学問的な現状説明の作法であって中立的な表現だ」と感じる向きもあるかもしれない。しかしながら、ここで考えたいのはテキストの政治的効果という問題なのである。その場合、学問の中立性など幻想にすぎない。

はたして、「戦後も沖縄は基地をもってきたのだが、その基地から派遣された軍隊が、アジアの人々（たとえばベトナム人）を大量に殺害してきたのだとすれば、沖縄もまた、この殺戮に加担したことになるのではないか」という文から、日本人マジョリティは沖縄人よりもはるかに重い自己の責任を感じとるだろうか。沖縄人を「この殺戮に加担」させた張本人こそ日本人マジョリティにほかならないということを読みとるだろうか。むしろ沖縄人の加害者性だけを読みとることによって自己の加害者性を棚にあげ安心してしまおうのではなかろうか。

すなわちこの文には、日本人マジョリティに対して、加害責任が軽減さ

2) 目取真の責任倫理による思考をみごとに示す論考としては、[目取真 1999-2000]。

れたかのように感じさせる政治的効果があるのではないか。「共犯化による差別性の軽減」というロジックがすでにマジョリティの常識であるとすれば、沖縄人の加害者性についての言明はすぐさまマジョリティに都合よく利用され読みかえられてしまう。また、「共犯化による問いの封殺」というロジックが機能してしてしまうならば、最悪の場合、「殺戮に加担した責任は沖縄人にあるのであって日本人は関係ない」と日本人の責任を不問にする読みが行なわれる危険性すらある。もちろん大澤が直接こう書いているわけではないし、こう読めと指示しているのでもない。しかしながら、「言語が、経験した以上のことまでも語ってしまう、ということは経験科学の担い手にとっては自戒しておいたほうがよい事実である」[上野 1997: 63]。このような警告も無意味ではあるまい。

さて、責任倫理で思考する沖縄人目取真俊は自己の加害者性を問わざるをえなくなる。逆に日本人は、沖縄人の加害者性についての言明に触れることによって、自己の加害者性を問うどころか加害責任が軽減された、あるいは、なくなったかのようにすら感じていく。このような理不尽きわまりない非対称性が生じるとすれば、いったいなぜなのか。

4 日本人のポジショナリティを消去するディスクール

この問いについて考えるために注目したい点がある。大澤は、沖縄人の加害者性を語った目取真のことばが「最も衝撃的」だったと言い、「深く気高い言葉」であり「この言葉が人の心を動かす」と最大限に評価している。わたし自身沖縄人の加害者性について言明したことがある[野村 1997][野村 1999]³⁾。しかし、特に日本人からの評価についてはホメゴロシされているよううさんくささを感じたものだ。

3) 他に沖縄人の加害者性・差別性を議論した論考を手許にあるだけでもあげておくと、[金城実 1978][儀間 1979][目取真 1999-2000][船越 2000][金城正樹 2001]などがある。したがって、「沖縄の加害責任がいささかも主題化されてはこなかった」[大澤 2000: 156]という記述は事実と反する。

また、目取真による沖縄人の加害者性についての言明を評価する一方で、自己も含めた日本人の加害者性についての言明は、大澤のこのテキスト中には厳密にいえば見当たらない。たとえば、「沖縄と違い、日本（人）は、むしろ戦争における加害者、侵略者として位置づけられるのが普通である」[大澤 2000: 156] というような「客観的」「事実確認的」な記述にとどまる。これは学問的テキストに特徴的な文体である。だがしかし、学問的テキストとは、「あたかも『誰かによって発せられたのではないかのような』（まるで『言語自身が語ってでもいるかのような』）体裁をとる、あえていえば欺瞞的な文章」でもあるのだ[神郡 1996a: 92]。わたしという沖縄人のポジションからいえば、大澤のこの文は、まるで他人事を語っているかのようにであり、他者の勝手によって日本人は加害者にされているとでも言いたいかのように響く。

あるいは、「『軍隊』が常時置かれている潜在的な戦場であることからくる苦難を、沖縄が、『われわれ』——大多数の日本人——の代わりに引き受けており、そのことによって、『われわれ』が苦難を免除されている」[大澤 2000: 153] と書く。「引き受け」たおぼえはない！「免除」してやったおぼえもない！

言葉尻をとらえようというのではない。テキストの政治的効果を読みとろうとするならば、主体の政治的位置＝ポジショナリティを記述しなければならないというだけだ。「軍隊」は、沖縄人の意志を無視して、日本人マジョリティが押しつけている。であれば日本人は、受動的に「苦難を免除されている」のではなく、積極的に「苦難」の押しつけに手をくだしているのだ。にもかかわらず、このような日本人のポジショナリティは大澤のテキストにおいてきれいさっぱり消去されている。換言すればそれは、「日本人のポジショナリティを消去するディスクール」といえよう。

ここでまずわたしが思い起こしているのは「言語行為論」（オースティン）である。ことばを発するということはすべて「行為遂行的」であり、何かを言うということは何かを行なうことでもある[Austin 1960=1978]。こ

これから考えることは、書くという行為そのものが政治を遂行する行為でもありうる、ということである⁴⁾。ここでいう政治とは、前節の最後に述べた「理不尽きわまりない非対称性」への貢献にほかならない。

すなわち、沖縄人自身による「沖縄人も加害者だ」という言明を、日本人のポジショナリティを消去するディスクールに回収することによって、日本人の加害者性の軽減や加害者性そのものを不問にする政治的效果が産出されるのではないか。いいかえれば、前節まで述べた「共犯化による差別性の軽減」「共犯化による問いの封殺」といったロジックの作動および常識化は、日本人のポジショナリティを消去するディスクールの介在によって可能となるのではないか。そして、このディスクールが、これらきわめて政治的なロジックを日本人マジョリティにおいてごく自然で常識的な行為として実践させているとすれば、まさにフーコー的な意味での権力という名にふさわしいといえよう。つまり、「言説(ディスクール)ないしその集合体としての言説体系は、ある特定のイデオロギー的負荷をともなつて権力装置として働くものにほかならない」[神郡 1996b: 123]。

ディスクールの問題性はまさにここにある。つまりそれが、たとえば「共犯化による差別性の軽減」や「共犯化による問いの封殺」というロジックを常識化するような権力だからであり、沖縄人の加害者性についての言明

4) もちろん本稿も例外ではない。また、このことについては上野千鶴子の論考も示唆に富む。「どんな思想も記述に先立っては存在しない。記述は思想それ自体の『遂行的言語行為 performative illocutionary act』(オースティン)である。記述は思想や研究を伝達する手段ではなく、それ自体が完結したパフォーマンスである」[上野 1997: 62]。「アカデミズムも時代の『言説空間』の構成要素のひとつとして、『公共の知』の形成に加担しているし、その責任がある。(中略)言説行為はそれ自体、投企的な行為であることを書き手は自覚する必要がある。その意味で言説行為は、たえざる選択であり、実践なのである。かれは『使用済みパンツを売る少女』をシステム論の枠組みのなかで『正常化』したことでは正しかったが、『使用済みパンツを買う男』をシステムの与件として不問に付した点で、かれの『システム論』の保守性があらわになる。その理論的な選択においても、宮台は政治的な実践をおこなっている」[上野 1997: 64]。

に触れた日本人に自己の加害者性を問わなくさせ、ごく自然に、加害責任が軽減されたあるいはなくなったかのようにすら感じさせていく権力だからこそ問題なのである。では、この権力は、どのようにして構築されるのか。

これらのディスクールは、社会の歴史的展開の過程で増殖され、社会構造として整備され、構造化され、何度も取り上げられる度に細密化し、再生産され、強化される。このように徐々に体制化し、社会構造化するディスクールは、われわれ一人一人の個人の奥深くまで浸透し、あたかも、それがわれわれの本質であると錯覚させるまでに繰り返される。

[伊藤 1996: 120]

大澤のテキスト、すなわち、日本人のポジショナリティを消去するディスクールも、このような「何度も取り上げられ」てきたディスクールのひとつといえないだろうか。そして、このディスクールは大澤によって再度「取り上げられ」たことによって、より「細密化し、再生産され、強化され」たといえないだろうか。このような意味において、ここでとりあげた大澤の書くという行為もまた、日本人のポジショナリティを消去するディススクールを「体制化し、社会構造化」し、最終的に「われわれ一人一人の個人の奥深くまで浸透」させる政治的実践なのではなかろうか。

もちろんこのような問題は、大澤のテキストのみにあてはまることではない。ほとんどの学問的テキストが「客観的」「事実確認的」な記述を行っており、その意味で、ポジショナリティを消去するディススクールそのものなのだから。だがしかし、そのような学問的テキストが過去と同じくこれからは沖縄（人）について語りつづけていくなれば、ますます「テキストは権力行使の場である」[神郡 1996b: 123] という警告が信憑性をおびてこざるをえないであろう。すなわち、「客観的」で「事実確認的」な学問を標榜することによる、たとえば、加害者性などの日本人への問いを封じ、沖縄人を共犯に仕立て、最終的に日本人を「安全」な位置におくという権力

行使。あえていえば、そのような権力行使のためにこそ沖縄(人)を必要とする学問。このように警戒することはあながち無意味なことでもなからう。

「沖縄を語る学問」の政治性・権力性について考えるうえでも、まだまだ大澤のテキストから離れるわけにはいかない。

5 ポジショナリティと関係性

「ひとたびフーコーの洗礼を受けると、あらゆる言葉づかい(ディスクール)を前にして、それが何を圧迫し、いかなる体制の構築に貢献するものであるのかを読む癖がぬけなくなる」[神郡 1996b: 122-123]。このようなことばを目にするとき、沖縄人小説家目取真俊が語った「沖縄人も加害者である」という言明についての大澤真幸のテキストは、わたしにとって、問題化の「誘惑」に満ちあふれたテキストである。大澤はこうも述べている。

もう少し感覚的にわかりやすい表現を用いれば、次のように、言ってもよいだろう。まったく犠牲者が同時に自らを加害者である——あるいは加害者でありうる——と言明するとすれば、その言葉は、犠牲者の加害者への究極の「赦し」として機能することになるだろう。加害者／犠牲者の敵対性が自己自身に内在すると見なすことが、無際限に開かれた普遍的な公共性への——たとえば沖縄をアジアへと開きうる——唯一の拠点となりうるのは、このためである。だから、ここで決定的に重要なことは、犠牲者が、犠牲者としての純粋性のうちに内閉するのではなく、加害者という汚点を自ら積極的に引き受ける用意がある、ということである。もし犠牲者が自身の犠牲者性にのみ固執するならば、「犠牲者へと欺瞞的に連帯を呼びかける公衆」と「真の犠牲者」との間の、相互的な排除の関係が帰結するしかあるまい。／次のことを付け加えておこう。目取真の言葉に触発されながら見てきたような「犠牲者の加害者への普遍化の言明」を宣することができる犠牲者の集団が、何か積極的な特徴によって定義されうる社会的な実体として存在している、というわけではない。要するに、沖縄人ならばこうした言明を発することが許されるが、多数派の日本人にはできない、とい

うわけではない。犠牲者＝加害者という二重性は、原理的に言えば、誰もがそうでありうるような態度を表明しているからである。犠牲者＝加害者という規定性は、いずれかの集団を特定しうるような客観的な性質ではないのだ。(中略) 人が惨めな犠牲者でも、凶悪な加害者でもありえたことへの覚醒を促す、不定の他者からの呼びかけに応ずるかかどうかということは、個人の責任に委ねられた選択の問題なのである。

[大澤 2000: 157-158]

「犠牲者が同時に自らを加害者である——あるいは加害者でありうる——と言明するとすれば、その言葉は、犠牲者の加害者への究極の『赦し』として機能することになろう」とはいったいどういうことだろうか。ここで「赦し」とはいかにも唐突だとわたしは思うのだが、このように書かれると、あたかも自然に「『赦し』として機能する」かのように感じてしまうひとも少なくないだろう。だからこそ、ここに超越的視点＝神の視点の導入をみないわけにはいかないのだ。いったいだれが超越的視点の導入をゆるしたというのか。つまりここには、このテキストの権力性が刻印されている。超越的視点を、特にここで、だれのゆるしも得ずに導入することによって、日本人大澤真幸のポジショナリティが消去されていることを、まず第一に注意しておこう⁵⁾。

つぎに、さしあたりこの場合の「犠牲者」を沖縄人、「加害者」を日本人(マジョリティ)として話をすすめると、沖縄人目取真俊は、日本人大澤真幸に対して、たとえば「沖縄人は日本人に対する加害者でもある」と述べたとでもいうのだろうか。また、「赦し」とは、何に関する「赦し」なのだ

5) ポジショナリティを問題化しなければならない理由としては、以下の議論を参照。「研究者が誰で、どの位置から発話しているか、という位置性 positionality の問題は、フェミニズムやカルチュラル・スタディーズ等の言説の政治化の問いのなかからあらわれた。社会科学では研究者の言説そのものが対象を政治的に構成する主要な要素となるからである。その意味で『中立的・客観的』な観察者・記述者の存在は否定される」[上野 1997: 81]。

ろうか。沖縄への基地の押しつけを「赦」すことなのか。そして、そもそも目取真は日本人に「赦し」を与えるために「沖縄人も加害者だ」と言明したのだろうか。そもそも目取真はだれに対して「沖縄人も加害者だ」と発話しているのだろうか。つまり、第二に注意したいことは、この問題を考えるうえで関係性という変数を欠落させてはならないということである。

確認しておきたいことがある。それは、「赦し」の決定権はあくまで犠牲者の側にあるのではないか、ということである。あるいは、その決定権はとことん犠牲者側に確保されなければならないのではないか。「赦」すか否かはあくまで犠牲者にゆだねられた問題であって加害者はそのことに関与できないのではないか。もしも加害者が、「犠牲者も加害者である」という犠牲者の言明を勝手に自分への「『赦し』として機能」させるならば、新たな暴力の行使というほかあるまい。そうなれば犠牲者は二重に犠牲を強いられることになる。なぜなら、犠牲にされてはならないという当然の権利をそもそも踏みにじられているだけでなく、加害者を「赦」すか否かという犠牲者だけが確保すべき権利すら奪われてしまうのだから。

さしあたり「赦し」についてこのように述べたが、「赦」すか否かの決定権を犠牲者から奪うことは究極的には不可能である。さらに、もし犠牲者が死んだならば、「赦し」の機会も永遠になくなる。つまり加害者が犠牲者から「赦」されることは永遠にない。加害者は勝手に「赦」されたと自己合理化するか、国家権力の力をかりて「恩赦」されるか、一方的に忘却するかしかなくなる。しかし、「恩赦」はけっして犠牲者本人からの「赦し」ではないし、勝手に忘却したとしても加害行為という現実が究極的に消えてなくなるわけではない。

ところで、「恩赦」とは国家が犠牲者になりかわって加害者に「赦し」を与える行為といえよう。この行為の権力性は、「なりかわり」を可能にするということにある。すなわち、犠牲者本人ではないにもかかわらず犠牲者になりかわって（犠牲者を名乗って！）、犠牲者本人以外には不可能なはずの「赦し」を社会的に機能させる権力なのだ〔野村 1997〕。もちろんこの

場合の「なりかわり」は厳密に言えば「偽装」にすぎない。しかしながら、権力がまさに権力であるゆえんは、このような「偽装」ですらあたかも「真実」であるかのように社会的に機能させようところにあるといえよう。超越的視点から語る大澤のテキストもこれと似た権力性を有しているのではなかろうか。

ところで大澤は、「沖縄人ならばこうした言明を発することが許されるが、多数派の日本人にはできない、というわけではない。犠牲者＝加害者という二重性は、原理的に言えば、誰もがそうでありうるような態度を表明しているからである」と述べている。原理的に言えばまったく異論はない。だがしかし、原理と現実を混同してはならない。日本人が沖縄人に向かって、たとえば、「日本人は加害者でもあるが犠牲者でもある／ありうる」と言明するとすれば、いったい何の意味があるというのか。つまり、単なる個人間の関係ではなく、日本人というポジショナリティを有する者と沖縄人というポジショナリティを有する者との関係をわたしは問題にしているのだ。両者のポジショナリティと関係性が視野にはいってれば、このような言明が欺瞞以外の何ものでもないことはあきらかではないか。仮に日本人が犠牲者であるとして、沖縄人が日本人にどのような犠牲をもたらしたというのか。仮に沖縄人が日本人に犠牲をもたらしうるとして、どのような犠牲が予測しうるのか。すなわち、原理を語るばかりでは無意味なばかりでなく有害ですらあるのだ。そして、原理を語ることによって現実の関係性を隠蔽するとすれば、それもまたひとつの権力といわざるをえないだろう。

もし上の文が、「犠牲者ですら加害者性を認めているのだから、なおさら日本人は敗戦の被害者意識ばかりに固執せず加害責任を認めるべきだ」という意味での日本人に対する発話ならば、話はわからないでもない。しかし、それならば「赦し」を感じるよりもむしろ「恥」や「罪」を意識するのではないか。にもかかわらず、なぜ「赦し」でなければならないのだろうか。また、何に対する「赦し」なのだろうか。そして、そもそもなぜ日本人大澤は、沖縄人目取真が「沖縄人も加害者だ」と言明した程度のこと

で、それを「犠牲者の加害者への究極の『赦し』として機能する」とまで述べてしまえるのだろうか。

6 「赦し」と共犯化のディスクール——むすびにかえて——

このように問うのは、大澤の「真意」を問題にしたいからではない。あくまでテキストの政治性を問題化したいのだ。もし仮に犠牲者が加害者に「赦し」を与えることが可能であるとすれば、最低限、加害者が加害行為をすでにやめていなければならないのではないか。それなしに犠牲者が加害者に「赦し」を与えてしまうならば、加害行為の継続に手を貸すことになり、犠牲者は自分で自分の首をしめることになってしまうのではなかろうか。いいかえれば、犠牲者みずからが加害者の共犯となってしまうのだ。そして、まさにこの現実こそが重要である。すなわち、在日米軍基地の75%を沖縄に押しつける加害行為を日本人マジョリティはけっしてやめてはいないのだ。

であるならば、ここで「赦し」をもちだしてくることの政治性はきわめて明白だ。すなわち、大澤のいう「犠牲者の加害者への究極の『赦し』として機能する」とは、沖縄人を共犯に仕立てる究極の権力的・政治的実践にほかならないのだ。

先に、大澤のテキストは日本人のポジショナリティを消去するディスクールであると述べた。だがそれだけでは不十分である。大澤のテキストは、共犯化のディスクールでもあったのだ。このことは、「もし犠牲者が自身の犠牲者性にのみ固執するならば、『犠牲者へと欺瞞的に連帯を呼びかける公衆』と『真の犠牲者』との間の、相互的な排除の関係が帰結するしかあるまい」などという記述を目にすると、ますます現実味をおびてこざるをえないのではなかろうか。

日本人マジョリティが在日米軍基地の75%を沖縄に押しつけている現在、このことに関するかぎり、沖縄人には犠牲者にならないという選択肢は現実として存在しない。この意味において、犠牲になりたくてなったわけで

もなければ「犠牲者性に固執」しているわけでもない。沖縄人を「真の犠牲者」の位置に固定しているのはほかでもない日本人マジョリティなのだ。また、「惨めな犠牲者」という言い方もまちがいである。「惨め」なのはむしろ他者に犠牲を強いることでしか自己を保てない日本人マジョリティの方ではないのか。したがってこう言い直すべきであろう。「沖縄人の犠牲者性に固執し『真の犠牲者』として本質化している主体こそ日本人にほかならない」と。こう言い直すことでさらにはっきりしてくるのは、この文においてもまた、日本人のポジショナリティが消去されているという問題である。

したがって大澤がこの文でいう「排除」もそもそも「相互的」なものではけっしてない。沖縄人はけっして日本人を排除していない。沖縄人に犠牲を強いる排除行為を実践しているのは日本人にほかならないのだ。逆に沖縄人は、むしろ犠牲を「受けいれ」させられてすらいる。このことを念頭において考えると、この文がだれに向けて発話されているのかということも問題といえよう。この文は「もし犠牲者が……」とはじまっている。わたしという沖縄人のポジショナリティからこれを沖縄人への呼びかけと考えれば、最後の「相互的な排除の関係が帰結するしかあるまい」ということばは恫喝として響く。

犠牲を強いられている者が犠牲から解放されたいと望むのは当然だ。そして解放のためには犠牲を強いられている現実をとことん強調しなければならない。さらに、沖縄人がアジアのひとびとに対する加害者であるならば、なおさら日本人によって犠牲にされていることを強調せざるをえない。なぜなら、日本人が軍事基地という犠牲を沖縄人に強いることによって、沖縄人はアジアに対する殺戮・暴力・脅威という加害行為の共犯にさせられてもいるのだから。この意味でいうかぎりにおいては、なるほど沖縄人は「犠牲者性に固執」せざるをえないといえよう。しかしながら、その上でなおかつ「相互的な排除の関係が帰結するしかあるまい」というならば、この文は、「犠牲者であることを忘れろ、さもないと沖縄人は日本人を排除し

ていることになる」という意味とも受けとれる。ならば、これこそまさに責任転嫁の論理であり、共犯化のディスクールそのものといえるのではなからうか。

さて、大澤は同じテキストの他の箇所自身「失敗」について語っている。「われわれがあゝの運動家に示そうとしたことは、『われわれ加害者もまたあなた方と同じ犠牲者である』という連帯の呼びかけであったことになる」[大澤 2000: 156]、と。また、上に引用した文には「犠牲者へと欺瞞的に連帯を呼びかける公衆」ということばもある。沖縄人目取真俊の「沖縄人も加害者だ」という言明に対して、「最も衝撃的」だったと言い、「深く気高い言葉」であり「この言葉が人の心を動かす」と最大限に評価する大澤真幸のテキストも、結局は、「犠牲者へと欺瞞的に連帯を呼びかけ」ているのではなからうか。あるいは、『われわれ加害者もまたあなた方と同じ犠牲者である』という連帯の呼びかけにみた「失敗」の反復にすぎないのではないか。そもそもどうして加害者が犠牲者と連帯できよう[野村 1997]。加害者が加害行為を継続しつつ犠牲者に「連帯を呼びかける」こと自体、そもそも欺瞞でしかありえないはずではないか。にもかかわらず、なぜ犠牲者に対して加害者の方から連帯をもとめるのか。その前に、加害者にはやるべきことがあるはずではないのか。

日本人というポジショナリティと沖縄人というポジショナリティとの関係性、日本人のポジショナリティを消去するディスクール、共犯化のディスクール、などを問題化して議論すると、「なぜ日本人／沖縄人と境界を引くのか」とか「二項対立主義ではないか」との反応が日本人から返ってくることがある。これは、日本人というポジショナリティを消去した問いの典型である。わたしは、単に境界が存在する現実を語っているにすぎない。そして、そもそも境界を引いたのは沖縄人ではない。境界を引き、現在もなお二項対立主義的暴力を実践しつづけているのは、日本人マジョリティにほかならないのだから。すなわち、沖縄に在日米軍基地の75%を押しつけ、犠牲を強いていることこそ、境界を引き二項対立主義を実践する暴力

そのものではないのか。その意味で、日本人マジョリティには境界を取り払う責任がある。連帯は、その責任を果たしてからでも遅くはない。

最後に、再び大澤を引用して筆をおくことにしよう。境界を取り払え！という「他者からの呼びかけに応ずるかどうかということは、個人の責任に委ねられた選択の問題なのである」。

《文 献》

- Austin, J. L., 1960, *How to Do Things with Words*, Oxford=1978, 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店
- 馬場靖雄, 1997, 『社会学のおしえ』ナカニシヤ出版
- 船越義彰, 2000, 「私も加害者だった」『うらそえ文芸』5: 67-69
- 儀間 進, 1979, 『琉球弧・沖縄文化の模索』群出版
- 池田 緑, 2001, 「グローバリゼーションとポジショナリティ——マイノリティとマジョリティの位置をめぐる一試論——」『国際政経論集』9: 203-213
- 伊藤直哉, 1996, 「ディスカールの（権）力」土田知則・神郡悦子・伊藤直哉『現代文学理論——テキスト・読み・世界——』新曜社, 116-121
- 加藤 節, 1999, 『政治と知識人』岩波書店
- 神郡悦子, 1996a, 「虚構言語行為論」土田知則・神郡悦子・伊藤直哉『現代文学理論——テキスト・読み・世界——』新曜社, 91-96
- , 1996b, 「『ディスカール』って何？」土田知則・神郡悦子・伊藤直哉『現代文学理論：テキスト・読み・世界』新曜社, 122-123
- 金城正樹, 2001, 「『恥さらし』の名付けと名乗り——金城馨さんとの対話より文化を考える——」『けーし風』30: 50-51
- 金城 実, 1978, 「沖縄における排外と解放——久志美沙子の小説『滅びゆく琉球民族の悲哀』に見る——」『新日本文学』33 (9): 61-69
- 目取真俊, 1999-2000, 「風流無談」『琉球新報』
- 野村浩也, 1997, 「日本人へのこだわり」『インパクション』103: 40-41
- , 1999, 「日本人になること 下」『琉球新報』5月11日朝刊
- 大江健三郎・目取真俊, 2000, 「沖縄が憲法を敵視するとき——「癒し」求める本土への異議——」『論座』62: 174-187
- 大澤真幸, 2000, 「普遍的な公共性はいかにして可能か」『世界』678: 150-159
- 進藤栄一, 1979a, 「分割された領土——沖縄, 千島, そして安保——」『世界』401: 31-51
- , 1979b, 「『天皇メッセージ』再論——戦後外交資料の読み方——」『世界』

407: 104-113

上野千鶴子, 1997, 「〈わたし〉のメタ社会学」井上俊他編『現代社会の社会学』岩波書店, 47-82

Summary

Okinawa's Political Complicity with The Japanese: Declarations which Allege "Okinawans are also Aggressors"

Koya Nomura

This paper discusses the danger involved in the declaration by Okinawans themselves that "Okinawans are also aggressors". The question of whether Okinawans are aggressors or not is first and foremost completely irrelevant. The reality lies in the fact that the problem surrounding Japanese aggression is difficult one to budge. Nonetheless, many Japanese have read this declaration as an opportunity to lighten their own sense of responsibility. This is the first danger that I would like to point out.

The second danger is that many Japanese read this declaration as one which does not question their own responsibility as aggressors. The logic behind this is, "not only are Japanese aggressors, but so are Okinawans". The reason for this is that the word victim is completely missing, and the fact that Japanese should take responsibility is not even questioned. This is the politics involved in the making of an accomplice.

In other words, the allegation that "Okinawans are also aggressors" holds the danger of evoking a political effect which blurs and ignores Japanese responsibility. In this paper, I will analyze the text of one Japanese sociologist to examine this problem.